

核弾頭貯蔵庫は「戒めの博物館」



①



②

チェコに17日開館

忘れないで 広島、長崎、福島

東西冷戦下のチェコに、旧ソ連が西側を攻撃するため極秘に配備した核弾頭の地下貯蔵庫があった。冷戦の終結から23年。放置されていた貯蔵庫は、核開発競争の愚かさを伝える博物館に生まれ変わった。17日の開館に先立ち、日本メディアとしては初めて内部を取材した。

(チェコ西部ミーショフで、宮本隆彦、写真も)



③

①重さ6トの扉を二重に配置して守られた核弾頭貯蔵庫の入り口 ②4つある核弾頭の貯蔵庫のひとつ。中央奥の写真パネルに写っている核弾頭と同型なのが貯蔵されている ③広島に投下された原爆の説明パネルを解説するパークラフ・ピトベッツさん

中央の広間はテニスコさを知るには、最前線だ。トよりやや広いぐらいだったことを知るのが一番いい。天井には核弾頭を移動させるクレーンが残り、残界から消えていない。博物館は広島や長崎の悲劇があり、二十発ずつ核弾頭を二度と起こさないため頭を保管できた。「いざの未来へのメッセージ」となれば、ここから運び出だ」と話す。

首都プラハから一時間ほど運転し、人口二十人のミーショフ村に着いた。緩やかな起伏に麦畑がうねる。貯蔵庫があったのは村外れの森。博物館に整備した「鉄のカーテン財団」代表のパークラフ・ピトベッツさん(左)の案内で訪れた。一九六〇年代に造られた貯蔵庫の入り口は、核攻撃に耐えられるようコンクリートを鋼鉄で挟んだ重さ六トの扉が二重になっていた。地中深くに掘られた内部の温度は六度。冷蔵庫並みだ。



してミサイルに搭載し、二時間以内で発射できた」とピトベッツさん。小部屋には、米ソの核開発競争に加え、広島と長崎への原爆投下や東京電力福島第一原発事故の資料も並ぶ。